

近世の図会等8選

奈良県立大学 名誉教授
西田 正憲

1. はじめに

江戸中後期に各地の風景を描いた図絵が大衆化する。1780(安永9)年、『都名所図会』が版行されると人気を博して、瀬戸内海沿岸の名所図会も数多く現れる。これらの大半は神社仏閣や故事来歴の地の説明と古人の歌の紹介にとどまり、瀬戸内海らしい風景を見出し難い。近世の人々が見つめる風景と我々が捉える瀬戸内海らしい風景は異なるといえる。しかし、そのような近世の図絵の中にも近代的な見方の萌芽を見出すことができる。1830(天保1)年以降になると、錦絵が版行され、浮世絵版画として名所や宿場などをビジュアルに描きだす。大胆な構図と色彩で自然の風景や庶民の生活をも捉え、新たな風景の世界を切りひらいた。瀬戸内海の自然を描いた浮世絵版画も現れる。本論では、版行されて広く普及した図絵で風景論の観点から特筆すべきものとして、図絵集である図会等の8選から描かれた風景を紹介したい。

2. 沢元愷『漫遊文草』1789

1789(寛政1)年、儒学者の沢元愷(平沢旭山)は、漢文の紀行文『漫遊文草』で瀬戸内海を豊かにしるす。その挿絵として、鈴木芙蓉の瀬戸内海の図絵5点が載っている。描かれた絵は漢画調で想像の名所絵の感を抱かせるものの、この時代において、比較的リアルな写生画であることに驚かされる。図1は大槌、小槌の形は似ていないが、五剣山、屋島、飯野山、象頭山の特徴はよく捉えている。芙蓉はその後1796(寛政8)年徳島藩蜂須賀家に登用され、「鳴門十二勝真景図」なども描いている。

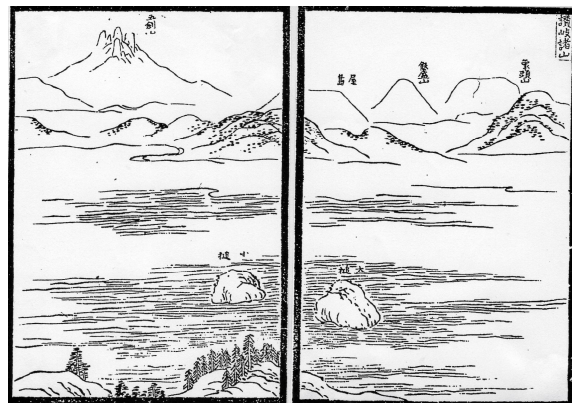


図1 讃岐諸山

3. 木村孔恭『日本山海名産図会』1799

『日本山海名産図会』の著者の木村孔恭(こうきう)は木村兼葭堂(けんかどう)として知られ、大坂の商人であるが、江戸中後期の文人であり、芸術家のパトロンとして名を残した人物である。絵師は蔀関月(しよみかんげつ)である。瀬戸内海に関する図絵は、高砂のイダコ、広島のカキ、讃岐のサワラの漁業、豊島の豊島石の採石業、伊予のカモ猟など20件が確認できる。そこから垣間見られるのは、瀬戸内海の豊かな生き物の風景であり、人々の営みの風景である。そこには自然と持続的に共生する風景があったといえる。

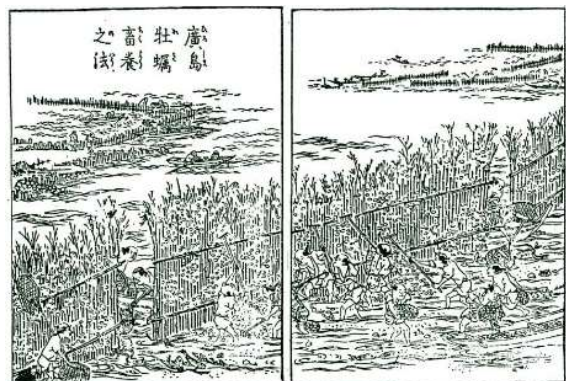


図2 広島牡蠣畜養之図

4. 淵上旭江『山水奇観』1799・1801

淵上旭江の『山水奇観』は全国の珍しい自然風景を網羅した版画の図絵集である。旭江の23年におよぶ全国遊歴から各地の自然風景を写しとったもので、全国183カ所200図を描き、そのうち瀬戸内海沿岸は46カ所49図となっている。右図は明石海峡や源平合戦の地を俯瞰図法で描いているが、当時の人々には、旧来の名所絵とは異なる新鮮な真景図に映ったにちがいない。18世紀後半は、絵画において西洋の透視図法や陰影法が流入し、真を写す「写真」や真に迫る「迫真」が追求されはじめた時代であった。旭江は明石海峡のようなのびやかな絵を描く一方で奇岩怪石の小景観を多く描いている。それは漢文学の教養に基づくシノワズリ(中国趣味)の風景であった。漢文学で学んだ中国の美意識に基づく風景が普及したのである。江戸後期は、漢学者の漢文で賛美する風景が全国に広まり、頼山陽の耶馬溪、斎藤拙堂の月ヶ瀬、安積良斎の妙義山などはその典型であった。



図3 上:播磨明石浦 下:備中豪溪

5. 谷文晁『日本名山図会』1811

1811(文化9)年、谷文晁は北海道から九州までの山岳88座90図を描く『日本名山図会』を刊行する。『名山真景』と称する写本もあるように写実性の強いリアルな図絵である。文晁は幕府老中にもなった松平定信に仕え、海岸防備のため江戸湾を調査し、現地を写生して《公余探勝図巻》を描くなど観察するまなざしを培っていた。『日本名山図会』は、描く視点が、俯瞰図法的な視点もうかがわれるが、多くは透視図法的に陸地の視点に立脚している。瀬戸内海沿岸では、摩耶山、書写山、先山(淡路富士)、五剣山(八栗山)、屋島、琴平山(象頭山)の社寺参詣の地や、六甲山、屋島などの故事来歴の地を捉える。これらは書写山を除いてすべてがのちに瀬戸内海国立公園に指定されるように、地形として特異な山容を示すなど自然景観としても優れた山々であった。『日本名山図会』には、伝統的な名所旧跡を捉えるまなざしとともに、近代的な自然景観を捉えるまなざしの萌芽が認められる。

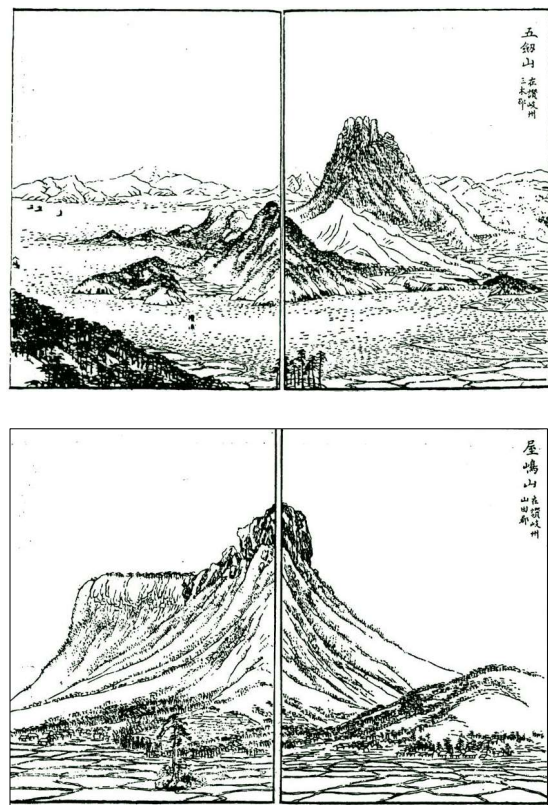


図4 上:五剣山 下:屋嶋山

6. 暁鐘成『金毘羅参詣名所図会』1847

1847(弘化4)年、暁鐘成著・浦川公佐画の『金毘羅参詣名所図会』によりやく多島海の斬新な展望景が現れる。3丁にわたる「下津井ノ浦ノ後山扇^{おうぎのたわ}峠より南海眺望之図」と題する塩飽諸島の見事な図絵である。図会は江戸、京都、大坂の書肆で版行されているので、広く普及したであろう。展望地の扇峠とは、金毘羅参り渡海の港下津井に至る標高約 100mの峠であり、登り坂を越えると突然瀬戸内海が眼前に現れる地点である。版行の前年の夏、54 歳の鐘成自らが絵師も同行させて約2ヶ月間の現地調査を行っている。のちの瀬戸内海国立公園は鷺羽山(133m)から展望した多島海を核心部として誕生するが、扇峠は鷺羽山に近接した峠である。この展望景には近代の瀬戸内海らしい風景の萌芽を読みとることができる。

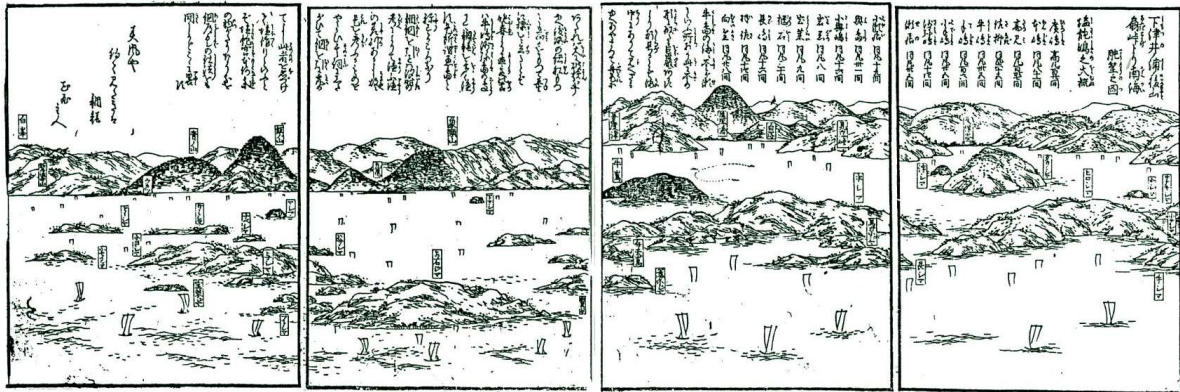


図5 下津井ノ浦ノ後山扇峠より南海眺望之図

7. 広重『六十余州名所図会』1853～56

浮世絵版画『東海道五十三次之内』の連作で評判をとった広重は、その後、近江八景、京都名所、浪花名所や木曾海道六十九次(合作)などの連作を重ね、1853～56(嘉永6～安政3)年に『六十余州名所図会』を描き、最晩年には『名所江戸百景』を生みだす。『六十余州名所図会』は江戸時代の旧国名の 68 カ国と江戸の代表的風景1カ所を描いた浮世絵版画集である。瀬戸内海沿岸は 20 カ国の名所を描いているが、広重はこれらを『山水奇観』『摂津名所図会』『厳島図会』『名山図譜』などの既刊本を種本として描いている。浮世絵で描く名所図会は浮世絵風景画とも呼ばれ、透視遠近法、陰影法など斬新な視覚で風景を主題とし、いまの写真や映像のように、名所のビジュアル化を図ったと指摘できる。ただ、傑作と称された『東海道五十三次之内』が旅人や町人を生かきと描き、春夏秋冬、雨雪風霧、朝夕などの移ろいの風景を抒情豊かに表現し、時の流れや物語まで想起させるのに対し、残念ながら『六十余州名所図会』は人がほとんど描かれず、色彩が鮮烈で叙情性に乏しく、情趣や面白みに欠け、名所の紹介に徹したといえよう。

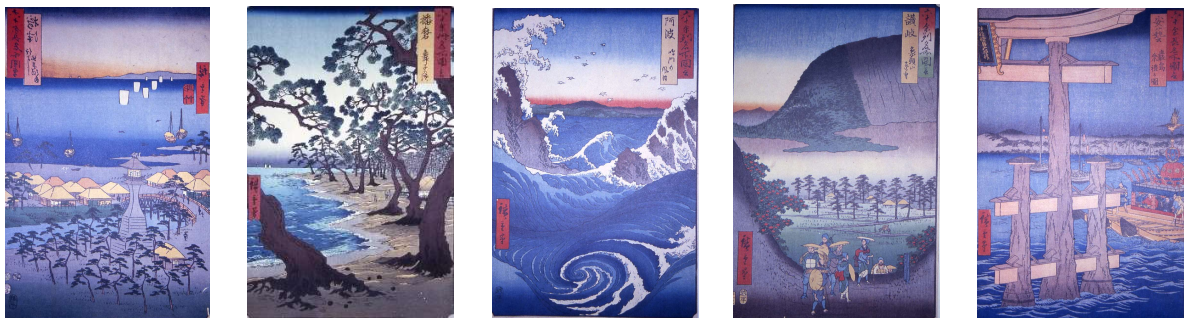


図6 摂津住吉出見の浜、播磨舞子の浜、阿波鳴門の風波、讃岐象頭山遠望、安芸厳島祭礼之図

8. 梶原藍水『讃岐国名勝図会』1854

1854(嘉永7)年、梶原藍水^{らんすい}著・松岡信正画の『讃岐国名勝図会』が江戸、京都、大坂、高松の書肆から版行される。著者も絵師も地元の高松藩士である。図7は西方寺から屋島と高松城下を捉えた図絵であり、屋島をリアルに描いている。初期の名所図会は社寺などの境内を説明するために俯瞰図法を用いていたが、ここでは透視図法で眼に見える実景を描いている。絵を描く視点が地上に降りてきたといえる。このような新たな視覚で瀬戸内海らしい風景が捉えられていくのである。

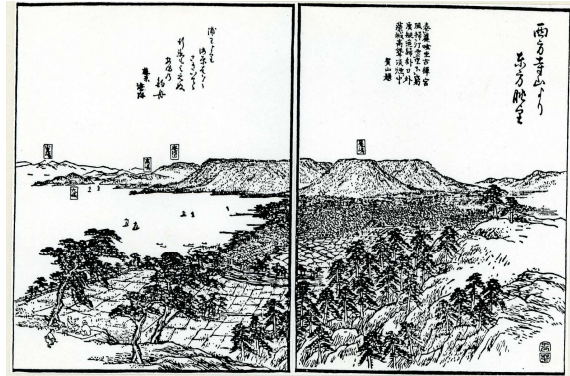


図7 西方寺山より東方眺望

9. 玉蘭齋貞秀『万象写真図譜』『海陸道中画譜』1864

1864(元治1)年に版行された玉蘭齋貞秀^{ぎよくらんさいさだひで}(歌川貞秀)画の『万象写真図譜』五篇に瀬戸内海の広域を鳥瞰図で描いた多色刷り版木の図絵集がおさめられている。同じ年にやはり貞秀の同じ画風の『海陸道中画譜』も版行される。『万象写真図譜』は備讃瀬戸から徳山城までの19景を描き、『海陸道中画譜』は安治川から萩までの25景を描いている。共に島々が浮かぶ多島海、港町や城郭が見える海岸など、瀬戸内海らしい風景が上空からの視点で描かれている。ここでは名所図会の俯瞰図よりもより上空の視点で地図のように描かれた図絵を鳥瞰図とよんでおきたい。鳥瞰図は、すでに葛飾北斎や鋤形恵斎によって国土が描かれ、江戸後期に流行していた。『海陸道中画譜』の序に貞秀の「大約名所を描んにも親しく実地を踏て見ざれば其真景ハ写しがたかり」の言葉がしるされているように、貞秀は現地調査を重視し、写実的な真景を追い求めていたのであろう。『万象写真図譜』の「写真」とは、真を写すであり、実物や実景をそのまま捉えるという意味である。これらの図絵集は地図情報を与えるとともに、風景へのまなざしに影響を与えたと考えられる。人々は、多島海という地理的概念を認識し、変化に富む島々や海岸を展望する楽しさとパノラマの視覚の醍醐味を見出したであろう。

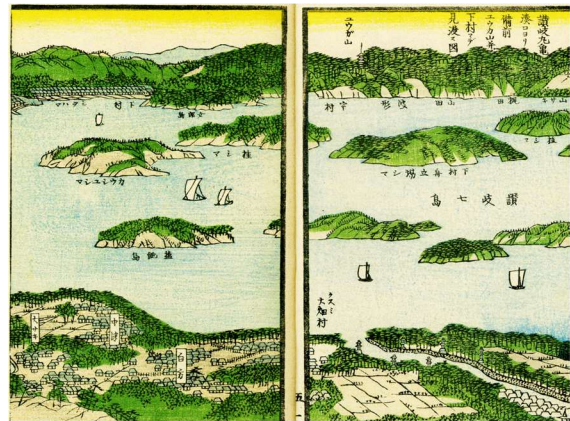


図8 『万象写真図譜』五篇

讃岐丸亀口ヨリ備前ユウカ山并下村マデ見渡ス図



図9 『海陸道中画譜』

無題 (下津井から鞆までの辺り)

補注

『海陸道中画譜』の図絵は国文学研究資料館国書データベース、<https://doi.org/10.20730/100311226>を利用。その他は筆者が原本を撮影または複写。